

[わたしのこの一冊]

Alain Couprie, *Marquise ou la « Déhanchée » de Racine*, Paris, L'Harmattan, 2006.

秋山伸子

ヴェラ・ベルモン監督の映画『女優マルキーズ』(1997年)では、ソフィー・マルソー演じるマルキーズが、まるで売春婦のように描かれている。事実、17世紀前半には、女優を劇団の共有財産とみなす偏見がはびこっていたことは、スキュデリーの戯曲『役者たちの芝居』(1632年)からもうかがえる。プロの女優に対してさえ、このような偏見があったのだ。ましてや、大道芸人に対する偏見はいかなるものであったろうか？ リヨンの町では、大道薬売りジャコモを父に持つマルキーズが、ダンスによって市の客を引き付け父親の商売を助けている。街角で踊るダンサーから出発して、『アンドロマック』によって不朽の名声を得るまでの女優マルキーズの成長物語の背後に、当時の演劇界、社会、街並みが登場人物の複眼的視点から鮮やかに描き出され、数々の「神話」が解体されていく。

肖像画1つ残されていない伝説の女優、謎だらけの女優マルキーズ。いつ、どこで生まれたのか？ フランスか、イタリアか、スイスか？ 洗礼の記録、公正証書、人口統計学者の調査結果、文学的な手記、著者はあらゆる資料を駆使して謎を解明しようとする。リヨン生まれの女優という説もあるが、リヨンの教区に完全な状態で保存されている洗礼の記録には、マルキーズの名前は見当たらない。

マルキーズは、モリエール劇団の俳優デュ・パルク（通称グロールネ）との結婚(1653年)によって女優への道を一步踏み出す。アリアヌ・ムヌーシュキンの映画『モリエール』(1978年)で描かれる貧乏な旅回りの役者モリエール、その才能が地方の観客によって開花したモリエールという「神話」を著者は鮮やかな手つきで解体してみせる。モリエール劇団は、確固たる庇護者の経済的支援を受けて、南フランスの三部会などで公演したのであり、1658年にパリに戻って来た時に劇団がセヌ川を介して運び入れた荷物(17人の劇団員の私物以外にも、衣裳、舞台装置など)は8トンにもものほり、何台もの荷馬車が必要なほどの財を築いていたのだ。

モリエールの喜劇『粗忽な男』(1655年)のイポリット役、『恋人の喧嘩』(1656年)のマリネット役などで女優としての経験を積んだマルキーズは、ルーアンにおいてジルベールの仕掛け芝居『ディアナとエンディミオンの恋』の夜の女神を演じ、コルネイユの心を虜にする(1658年)。パリの町と宮廷についてのニュースを伝える週刊紙で詩人ロレは、1661

年ヴォー＝ル＝ヴィコントにおける祝祭でのモリエール劇団の公演を評して、マルキーズを「美しい女優」と称え、その「ダンス、朗唱」が人の心を奪うものであると述べている。『「お嫁さんの学校」批判』(*La Critique de L'École des femmes*, 1663年)におけるクリメヌ役の「まるで身体の関節すべてが外れたかのような」「機械仕掛けの人形」を思わせる演技、「腰をくねくねさせた」演技は観客に強い印象を残した。ラシーヌが友人に宛てた書簡で『ラ・テバイッド』(1664年)のヒロイン、アンティゴヌ役をマルキーズに演じてもらいたいと書いた時も、この演技に言及しているほどだ。マルキーズの夫グロールネが病に倒れたため、結局この配役は実現しなかったが、悲劇俳優としてのマルキーズの才能にラシーヌが注目していたことを物語るエピソードである。マルキーズは、『アレクサンドル大王』(1665年)のヒロイン、アクシアヌを演じて、当時の悲劇の殿堂ブルゴーニュ座の看板女優と並び称されるほど高い評価を得る。

モリエール劇団による初演からおおよそ2週間後、『アレクサンドル大王』は、ライバル劇団ブルゴーニュ座でも公演が開始される。これは、自分の戯曲を初めて舞台にかけてくれた恩人モリエールに対するラシーヌの重大な背信行為であった。夫グロールネの死後、ラシーヌの恋人となっていたマルキーズは劇団で微妙な立場に置かれる。『人間嫌い』(1666年)でマルキーズが演じた役はエリアントというのが通説だが、アルシノエ役というのも考えられるのではないかと著者は言う。自分の誘いになびこうともせず、ラシーヌを「ひっかけた」女に対する皮肉や苛立ちがこの配役に込められていたとしたら？ まるで推理小説さながらに、謎解きが展開されていく。『人間嫌い』の後、マルキーズは舞台から遠ざかっているが、その理由は？ 妊娠していたのだ、しかもそれはラシーヌの子ではないか。

1667年マルキーズはブルゴーニュ座に移籍する。1647年に改修されてから最大2000人の観客を収容できるようになったブルゴーニュ座の舞台で、マルキーズはアンドロマックと一体化して、観客の涙を誘う。この時マルキーズもまた、伝説のアンドロマック同様、身ごもっていた。だが今度の父親はラシーヌではなかった。墮胎に失敗して病床にあるマルキーズの枕元に、ラシーヌは、お腹の子が自分の子でないと知りながら、付き添い、最期を看取ったのである。